

海風全集 第十一卷

荷風全集

第十一卷

岩波書店

昭和三十九年十一月二十四日 印刷

昭和三十九年十一月二十八日 發行

荷風全集第十一卷

定價六百圓

著 者 永 井 壯 吉

發 行 者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
株式會社 岩 波 書 店

目次

裸體	一
老人	三
吾妻橋	五
日曜日	五
心がはり	七
たそがれ時	七
うらおもて	九
捨て兒	一〇
袖子	二七
男ごころ	二七
夏の夜	二四

珊瑚集序

目次

ましろの月	ボオル・ヴエルレエン	二〇五
道行	ボオル・ヴエルレエン	二〇七
夜の小鳥	ボオル・ヴエルレエン	二〇九
暖き火のほとり	ボオル・ヴエルレエン	二一〇
返らぬむかし	ボオル・ヴエルレエン	二一一
偶成	ボオル・ヴエルレエン	二二三
沼	ビエエル・ゴオチエ	二二五
池	エドモン・ピカアル	二二七
音楽と色彩と匂ひの記憶	エミル・ヴオオケエル	二二九
秋のいたましき笛	アア・エフ・エロオル	二三二
佛蘭西の小都會	アンリイ・ド・レニエエ	二三三
葡萄	アンリイ・ド・レニエエ	二三七
われはあゆみき	アンリイ・ド・レニエエ	二三九
夕ぐれ	アンリイ・ド・レニエエ	二三三
秋	アンリイ・ド・レニエエ	二三三

正午	アンリイ・ド・レニエエ		二三五
告白	アンリイ・ド・レニエエ		二三七
庭	アンリイ・ド・レニエエ		二四〇
餅	アンリイ・ド・レニエエ		二四二
年の行く夜	アンリイ・ド・レニエエ		二四四
暮方の食事	シャアル・ゲラン		二四八
道のはづれに	シャアル・ゲラン		二五一
ありやなしや	シャアル・ゲラン		二五四
四月	ギユスタアヴ・カン		二五五
ロマンチツクの夕	伯爵夫人マチユウ・ド・ノワイユ		二五七
九月の果樹園	伯爵夫人マチユウ・ド・ノワイユ		二六〇
西班牙を望み見て	伯爵夫人マチユウ・ド・ノワイユ		二六三
菊花の歌	シャアル・グランムウラン		二六六
あまりに泣きぬ若き時	フェルナン・グレエ		二六九
沈みし鐘	スチユアル・メルル		二七〇

夏の夜の井戸	スチユアル・メリル	二七三
奢侈	アルベエル・サマン	二七六
珊瑚集拾遺		二八七
をかしき唄	Tristan Kingsor	二八九
嘆息	ステフワン・マラルメ	二九四
シヨールパンの曲	アンナ・ド・ノアイユ	二九五
シユーマンをきゝて	アンナ・ド・ノアイユ	二九八
偏奇館吟草		三〇一
はしがき		三〇三
夏うぐひす		三〇五
からす		三〇七
舊 調		三〇九
絶 望		三一
こほろぎ		三二三
小 春		三二六

暗き日のくり言	三二八
冬の草	三三〇
口ずさみ	三三三
狼	三三四
日曜日	三三八
船の上	三三〇
涙	三三三
冬の窓	三三四
ハーモニカ	三三九
燕	三四二
震災	三四五
窓の禽	三四七
門づけ	三四九
鳩	三五三
墓詣	三五六

目 次

影法師	三九
拷問	三二
堀割の散歩	三三
落花の風	三七
夜半の風	三九
犬の聲	三七
雀	三七
暮春の庭	三四
無題	三六
海月の歌	三八
山の手	三九
繚蟲	三一
不淨の涙	三三
蟀	三五
雨蛙	三八

武 器	三九〇
秋窓風雨夕	三九二
永きわかれ	三九四
ひるがほ	四〇二
偏奇館吟草拾遺	四〇五
即 興	四〇七
Au Café Printemps	四〇七
自由劇場の稽古の午過ぎ	四〇九
朽行く老樹	四二一
亂餘漫吟	四二三
外 套	四二五
日 の 暮	四二七
年はゆく	四二九
押 繪	四三二
銅 像	四三三

目 次

冬の目	四二六
草の花	四二八
靜なる小みち	四三〇
荷風百句	四三三
荷風百句序	四三四
春之部	四三五
夏之部	四三八
秋之部	四四一
冬之部	四四三
俳句	四四七
狂歌	四九三
小唄	四九七
漢詩	五〇一
後記	五〇七

裸

體

岡村左喜子は千葉縣船橋の町の或湯屋の娘である。

去年十八の暮から東京銀座の佐々木といふ經理士の事務所に通勤してゐる。

或日いつものやうに歸りの時刻の來るのをおそしと、支度や挨拶もそこ／＼に同僚の君子と云ふ女給仕と連立つて出て行かうとした時である。

「おい。ちよつと待ちなさい。すこし聞きたいことがあるんだ。」と呼止められて二人は明けかけた戸口をうしろに、振返つて佐々木先生の顔を見た。

禿げ上つた額と下顎の張出した四角な顔に相應して、兩肩の怒つた身體付はいかにも逞しさうに見えるが、夕日の反射する窓の光線で、短く刈つた口髯の白さが、目立つて見えるので、年はもう五十を越してゐるであらう。佐々木は椅子から立つと共に出張つた布袋腹をデスクの縁に押しつけながら、

「左喜子さん、あなたでいい。君子さんには用はない。先にお歸んなさい。」

君子が目禮して一人先に戸口を出るのを見送り、經理士は少し小聲に、

「もつと此方へおいで。」

「はい。」

「今日は誰もゐないから一寸きいて置きたいと思ふことがあるんだ。」

「何です。先生。」

「わたしの此室へ出入をするのは小島君とあなただけなんだからね。君子は電話掛だし、來てから間がないことだし。それで一番さきに聞いて見るんだよ。もしかわたしの思違ひだつたら、わたしの方からあやまるつもりだ。今朝そのテーブルの上にいつも來る蒲原さんといふお客様が紙幣束を置いて行つた。ところが後で調べて見るとすこし足りないんだよ。今日ばかりぢやない。この間から時々どうかすると、さういふ事があるんだ。あんたばかり調べやうといふんぢやない。段々外の人も調べて見たいんだがね。一番心やすくなつてゐるから、君から先に聞いて見るのだよ。惡く思つちやいかんよ。ちよつとその手提袋を見せてくれないかね。」

「はい。御覽なさい。わたしお金なんぞ取るやうな、そんな女ぢやないわ。どこ見られても平氣だわ。」

「それア能くわかつてゐる。一應きいて見るだけさ。怒つちやいかんよ。」

佐々木經理士は受取つた手提袋から、中の物を一ツ一ツテーブルの上に置き並べた後、左喜子の

身近に立寄り、宥めるやうに軽く肩先から二の腕を指の先で撫でた。残暑のまだ去りきらぬ暑い日のことで、左喜子の着てゐるワンピースの袖は出来るだけ短く、わづかに肩先と脇の下とを隠してゐるばかり。二の腕に残つた種痘の痕がよく見える。

「やつぱり、わたしの思違ひだつたよ。さアみんな返しませう。」

「もういいの。先生。何ならお辨當箱の中も調べてください。」

左喜子は別に憤慨したやうな様子もなく、手にしたハンケチで額の汗を押へ、下ぶくれの片頬に笑くぼを寄せながら、男の顔を眺めてゐる。休戦この方、物がなくなつたり盗まれたりする話は、電車に乗つても、家へ歸つても、ビルディングの中の事務所へ來ても、毎日々々耳にしない日は殆どない。紙入の中の紙幣なんぞは落したのか掠られたのか、分らずじまひになくなつてゐる事がある。傘立の中にさしてあつた傘が見えなくなつたり、壁に掛けたレーンコートがいつの間にかなくなつてゐた話もあれば、朝持つて來た辨當箱の中のお數がお午に蓋をあけた時にはもう無かつたといふやうな話もあるくらゐ。左喜子は自分の物さへなくならなければ、それでいいのだ。人から疑を掛けられる位の事に、一々氣を揉んだり怒つたりしてゐたら限りがないとも思つてゐるらしい。

佐々木は初め左喜子が口惜しがつて怒つたり泣いたりしはせぬかと、ない／＼危ぶんでゐた矢先、案に相違した女の様子に、どうやら氣の毒な心持もするし、又それとは全く反對に、生來手癖の惡